

研究ノート

社会学的エッセイ (その2)

—身近な問題と社会をつなぐ—

片 桐 新 自

Sociological Essays (2):
Connection between Ordinary Problems and Society

Shinji KATAGIRI

Abstract

Sociology is interesting and useful, but such good points of sociology aren't understood exactly by people. The best point of sociology is its ability to analyze both ordinary problems and international problems from the same view point, that is, the connection with society. In this paper, I try to show the connection between various ordinary problems and society to inform the charm of sociology.

Key words: sociological thinking, ordinary problem, society

抄 録

社会学はおもしろく有用な学問だが、必ずしもその魅力が正確な形で伝わっているとは思えない。社会学の最大の魅力は身近で起きている問題から国際的な問題まで、社会との関わりという視点で同じように分析できることにある。本稿では、そうした社会学の魅力を理解してもらうために、様々な身近な問題を取り上げて、社会との関連を語る。

キーワード：社会学的思考、身近な問題、社会

〈目次〉

はじめに

- 第1章 便利な生活の行き着く先は…… (2002.8.21)
- 第2章 「平成の大合併」より「平成の大分割」を！ (2002.10.12)
- 第3章 ペットからファミマルへ (2002.11.1)
- 第4章 世界の「裸の王様」 (2003.3.18)
- 第5章 嫌咳権 (けんがいけん) の確立を！ (2004.1.29)
- 第6章 シュレッダーが家電化する？ (2004.4.10)
- 第7章 捕まったブランコ (2004.6.30)
- 第8章 「大学3年制時代」がやって来る？ (2005.2.24)
- 第9章 人生八掛け説 (2005.6.15)
- 第10章 育児休暇 (2005.6.24)
- 第11章 友人になってしまう男と女の時代 (2005.7.10)
- 第12章 キャスター付バッグの普及 (2005.7.26)
- 第13章 いつか消える戒名と法事 (2005.8.31)
- 第14章 小泉的社会とホリエモンの夢 (2005.9.10)
- 第15章 戦後は終わった (2005.12.27)

おわりに

はじめに

4年前に「社会的エッセイ——時代診断と政策提言に向けての素描集——」(『関西大学社会学部紀要』第34巻、第1号所収)を本誌に発表しましたが、今回はその続編です。社会学の可能性をわかりやすい形で示したいという問題意識はその時と変わっていません。社会学は社会で起こっている様々な問題を分析対象にすることのできる魅力的な学問です。それを具体的な形で示すために、2002年後半期から2005年末までの3年半の間に、HP (<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~katagiri/>) 上で随時公開してきた文章の中から、いくつかを選んでここに研究ノートとして発表させてもらうことにします。もちろん、HP上でも同じ文章を読むことはできますが、そこには多様な内容のものが含まれていますので、こうしてエッセンスを抽出して読んでもらった方が、社会学の見方を重点的に理解する上では効果的だと思います。今回は、身近な問題から社会を考えるという内容のものを比較的多く選んでみました。

通常の学術論文と違い、学者・研究者と呼ばれる人たちより一般の方々にも読んでもらえるものと思っていますので、文体はソフトな「です・ます」調で書いています。こうした一般の人が受け入れやすい形式の文章こそ、社会学という学問を理解してもらうためには大事なことだと考えています。各章タイトルの後に入れてある日付が、ホームページ

上で公開した日を示しています。一応、公開順に並べておきましたが、個々の章は独立していますので、興味をもった章から読んでいただいても構いません。

第1章 便利な生活の行き着く先は……（2002. 8. 21）

いつも配達してもらっているお米屋さんが休みの時にお米が切れてしまったので、近所のスーパーにお米を買いに行き、「無洗米」と表示された商品があるのを見てびっくりしました。とがず（洗わず）に炊けるお米なのだそうです。うーん、そこまで手間を省きたい人がいるのかと、ある種感動すらしてしまいそうになりました。ちなみに、その時ついでに買って来た冷凍枝豆は流水で解凍するだけで食べられるというものでした。（ちなみに、私はゆでましたが。）今、スーパーを一回りすると、「おおっ、こんな商品もあるのか」と驚くものばかりです。お総菜売場が充実しているのは当然ですが、野菜売場もカット野菜というのがずいぶん出回っています。1～2人分のカレー用のカット野菜もあれば、焼き肉用カット野菜もありました。一人暮らしの人にとっては、こうしたものを利用した方が安くつくというのはよく言われることですが、カレーに使う玉葱、人参、じゃがいもなんかは、肉じゃが、シチューはもちろん、野菜いためにしたり、みそ汁の具にしたりといろいろ使えるので、1人でもちゃんと自炊していたら使い切れる野菜で、トータルでは安くなると思うのですが……。サラダもカットされてパックされたものがたくさん置いてあります。サラダは新鮮さが命だと思うので、あらかじめ切っておいてあるサラダっておいしくなさそうなのですが……。私が1人暮らしをしていたときには、トマト、レタス、きゅうりなんかは、冷蔵庫に常備していたものです。そう言えば、先日問題になった中国産のほうれん草もゆでて食べやすい大きさにカットされた冷凍物でしたね。結局、こうした商品は、安くつくかどうかより、手間を省きたいという志向性が生み出したものなのではないでしょうか。もちろん、中にはなるほどこれは便利だなと思うものもありますが、この程度の手間すら省きたいのかと唸ってしまうようなものも少なくありません。ご飯とカレーがセットになっていて電子レンジにかけるだけでカレーライスが食べられる商品などは確かに便利かもしれない私も思うのですが、お米をとぐ手間だけ省けるといえるのは、それほど魅力的だとは思えないのですが……。

社会は、人々をつらい作業から解放し、より便利な生活を享受できる方向に変化をしてきました。様々な技術革新の最大の原動力は、より楽な生活がしたいという人々の願望だったと言っても過言ではないでしょう。上水道や都市ガスの普及は、しんどい水汲みや薪割りから人々を解放しましたし、洗濯機は、1年間に象1頭分と同じだけの量の洗濯物を

手洗いしていた主婦たちを、その苦役から解放しました。スーパーマーケットができたことで、買い物かごを下げて、今度は八百屋さん、次は魚屋さんなんて面倒な買い物をする必要はなくなり、まとめてレジで会計を済ませられる上、ビニール袋もくれるので、仕事帰りでも買い物が簡単にできるようになりました。これで便利だと思っていたら、コンビニエンスストアなるものが現れ、今や24時間いつでも好きなときに買い物ができるようになっています。私自身もこうした便利な生活の恩恵をたくさん受けていますので、こうしたものを決して単純に否定するつもりはありません。しかし、「無洗米」なんて商品の存在を見ると、一体この「便利な生活をしたくない」、「手間を省きたい」という欲望はどこまで行くのだろうかと少し不安になってきます。

今、六甲アイランドにある神戸ファッション美術館で、鉄腕アトムを中心としたロボットに関する展示が行われています。ここで、「ロボット」の歴史について知ることができます。「ロボット」という言葉は、1920年代にチェコスロバキアの作家チャペックが自分の戯曲の中で初めて使ったもので、チェコ語で「労働」を意味しているそうです。この戯曲は、人間が労働の苦役から解放されるために代わりに働く「ロボット」を作り出すのが、最後にはそのロボットたちに反抗されてしまうというようなストーリーで、その後の「ロボット観」に大きな影響を与えました。手塚治虫の「鉄腕アトム」にもこうしたストーリーがよく出てきます。人間に奉仕するために作り出されたロボットたちが、人間の奴隷のように扱われることに疑問をいただき抵抗をし、そうした人間に歯向かうロボットとアトムが悩みながら闘うといったストーリーです。

ロボットと言えば、「ドラえもん」もありますが、ドラえもんは22世紀に大量生産された「子育てロボット」です。偶然なのかもしれませんが、藤子・F・不二雄氏はいいところをついていると思います。今、2足歩行のできる人間型ロボットの技術が急速に進んでいます。こうした人間型ロボットの活躍場所として、「子育て」の領域は現実的に考えられると思います。産業用ロボットであれば、何も人間型をしている必要はないのです。人間型という形態が生きていくのは、現実の人間と関わりをもつような場面です。人間型ではないロボットは機械というイメージが強く他の電化製品とあまり変わらない冷たいイメージになりますが、人間型だと仲間、家族という意識を持ちやすくなるのは確実です。AIBOを本当のペットのように考えている人がたくさんいることで、このことは証明されていると思います。人間型ロボットは、お年寄りの相手や子どもの相手として普及していくのではないかというのが私の予測です。特に、新しいものを受け入れる柔軟な感性を持った子供たちの相手役としての「子育てロボット」の誕生は、そう遠い先のことではないように思

います。今でも、テレビという機械に子どものお守りをさせている親はたくさんいるので、すから、もっといろいろなことのできるロボットが相手をしてくれるとなったら、ロボットに面倒な子育てを任せようとする人はきっとたくさん出てくるでしょう。その行き着く先はどこなのでしょう？映画公開された「ドラえもん」シリーズの1本に、しんどいことをすべてロボットや機械に任せていたら、ついに人間たちは歩くことすらまならなくなってしまうという物語があったように思いますが、もしかしたら本当にそんな日がいつかやって来るかもしれません。ひたすら便利さを追い求め、楽な生活を求め続けたら、その先には何が待っているのか、たまには考えてみるのも必要なことではないでしょうか。

第2章 「平成の大合併」より「平成の大分割」を！（2002.10.12）

現在、各地で市町村合併が進んでいます。核になる市に周りの町村が編入されるケースが多いですが、大型合併で新しい市ができたケースもあります。昨年1月に、田無市、保谷市が合併してできた「西東京市」、5月に、浦和市、大宮市、与野市が合体して「さいたま市」などが比較的有名でしょう。これから予定されている合併の中には県を越えての合併もあります。こんなに市町村合併が生じるのは、政府が積極的に市町村合併を推進しようとしているからです。政府が市町村合併に積極的なのは、自治体によっては過疎化が極端に進み、独立した基礎自治体としてのサービスを提供することが困難になってきていることが最大の理由です。合併される側の小さな自治体にとっては他に手だてもないので仕方がないといった感じでしょうし、合併する側の大きな自治体にとっては、財政規模がさらに大きくなり、都道府県からの権限委譲が進むことが期待できるのだと思います。一見すると、政府と自治体の両者の利害が一致していて何の問題もないように思われますが、実は大きな問題をはらんでいると私は思っています。それは、この合併によって、昔から使われ人々が愛着を持つ地名が消えて行きかねないということです。そして、その長期的結果としては、地域の歴史とアイデンティティが失われていくことになるのではないかと危惧しています。政府は、昔からの地名は、自治体内部の地域表示名として残せば十分だと思っているようですが、明治以降の日本で生じてきたことを鑑みれば、事態はそう楽観できるものではないと思います。

私は、こうした「合併」政策より「分割」政策こそ、今の日本に必要な改革ではないかと思っています。分割と言っても、もちろん現在の基礎自治体をさらに細かくしろと主張したいわけではありません。市町村ではなく、都道府県を全部で90~100程度に分割し、これを新基礎自治体にしたらいという主張なのです。現在の日本の自治制度は、都道府

県と市町村の2層制になっていますが、これは住民にとってあまりうまく機能している制度とは言えません。特に、都道府県という広域自治体が、我々の生活にとって何の意味があるのかよくわからないというのが正直なところだと思います。この範囲は、江戸時代まで使っていた延喜式による国名と藩名をベースとして統廃合を繰り返してできてきたものです。しばしば、日本でもっとも地方自治がうまく機能していたのは江戸時代だという指摘がなされるように、かつてはそれなりに藩ごとに独立採算でやっていました。藩は約300あり、これを基礎自治体として考えていくこともできるのですが、私としては1000年以上の歴史を持つ旧国名を全面に出す方に魅力的に感じます。藩は江戸幕府の都合により作られた面が少なからずありますが、旧国の方は、日本の地形が生み出したもっとも自然な区分で、はるか昔から日本人はこの範囲で主たる生活をなしてきたと言えるのです。この旧国の範囲をベースに自治体を考えるのが、歴史を継承し、地域住民としてのアイデンティティを確立する上でも、もっともよいと思います。たとえば、三重県は近畿なのか中部なのか、しばしば議論になりますが、鈴鹿山脈の西側の伊賀と東側の伊勢や志摩を無理にくっつけて三重県を作ってしまったから、こういう事態が生じるのです。旧国の区分に従って分ければ、伊賀は近畿に、伊勢と志摩は中部に所属するという風にすっきりと分けられるでしょう。大阪府は兵庫県の東側の一部を含んだ摂津と河内と和泉に分けた方が、文化的にまとまりがよくなりますし、京都府も山城と丹後に分け、兵庫県は淡路、播磨、但馬、丹波に分けてみると、ずいぶん地域特性がはっきり見えてきます。

関東より西はほぼこの旧国の区分をベースにして行けばうまくいくと思います（信濃は大きいので4つぐらいに分けた方がいいと思います）が、関東以北はかつて大和朝廷からあまり注目されていなかったために、旧国の区分だけではだめでしょう。武蔵国など今の東京都と埼玉県を合わせた範囲ですが、こんな広大な範囲をひとつの独立自治体にするには現在では到底できません。東京都だけでも分割が必要でしょう。23区だけで十分独立自治体になれますので、最低でも3つにはしないとイケないでしょう。人口の集中度から言えば、もう少し分ける必要があります。東北も北海道も（そして沖縄も）旧国は非常に大雑把な区分になっていますので、このあたりも丁寧に分けていくと、最終的には100ぐらいになると思います。壮大な地方制度改革案ですが、まじめに考えてみる価値はあるのではないかと考えています。

第3章 ペットからファミマルへ (2002.11.1)

「ペット」という言葉がひっかかっています。日本語では、「愛玩動物」と訳されるよう

に、ペットとはかわいい存在でありさえすればいいというイメージがあります。現在、室内で飼う小型犬に人気があるのも、犬がペットと考えられるようになってきたからだと思います。もともと、犬は「狩猟犬」として人間とともに暮らすようになり、私が子どもだった頃は、主として「番犬」としての役割を果たすものとして位置づけられており、「ペット」という言い方にはなじまない存在でした。それが、だんだんかわいいだけの存在になり、かつて猫が果たしていたような役割（ソファの上でごろごろしてたり、ボールとじゃれついているような愛らしい仕草を見せる）を果たすようになってきています。こうした変化を、私は「イヌのネコ化」と呼びたいと思っています。

もちろん、ペットとしての犬というあり方がいけないということではないのですが、すべての犬があるいは人間と暮らす動物が「ペット」と呼ばれ、かわいいだけの存在になるのは、どうなのだろうかという気がします。時として、犬や飼育している動物だけでなく、子どもも「ペット化」されていないだろうかとふと疑問に思ってしまう。子どもも動物もしっかりしつけて、TPO（時、場所、状況）に応じた行動のできる存在に成長させなければいけないのですが、かわいいペットでいてほしいという気持ちが強くなると、しっかり成長させるより、ともかくかわいいままでいさせようとして、しつけが甘くなってしまっているのではないかと心配です。そこで、何でもかんでも「ペット」と呼ぶのはやめ、「ファミマル」(Famimal = Family + Animal) という呼び方にすることを提案したいと思います。多くの方は、長く一緒に暮らしている動物に対して家族の一員だという気持ちを持つという話から発想したのですが、家族の一員であれば、ただかわいいだけでなく、家族という集団の中でそれなりの役割を果たさなければなりません。また、かわいく思えなくなったペットが捨てられるなんてこともしばしば生じていますが、これも家族の一員、ファミマルだと思えば、そんな冷酷なことも簡単にはできないでしょう。単なる言葉の言い換えで本質的な問題ではないと主張される方もいるかもしれませんが、言葉ができることによって、現実の事態が変わることはしばしば起こります。何でもかんでもペットと呼ぶのはやめ、ファミマルと呼ぶようにすることによって、動物に対する接し方や価値観が変わる可能性は十分あると思っています。

第4章 世界の「裸の王様」(2003. 3. 18)

イラク問題が切迫してきました。フセイン大統領が亡命して戦争が回避される可能性もありますが、今のところ武力行使が行われる可能性が圧倒的に高いでしょう。日本人はみんな戦争が嫌いですから、前者のような結果になったら、拍手喝采なのでしょうが、それ

もおかしな話です。実際に行使しなくても圧倒的な武力を誇示して言うことを聞かせるなんて、結局降伏させたということなのですから、実質的に戦争したのと一緒です。20何万人もの軍隊でイラクの周りを固めているのですから、すでにその時点で戦争は始まったと言った方が正確でしょう。実際に武力行使が行われても、軍事的にはアメリカが負けるわけではないのですから、フセインが大統領の座を追われるのは時間の問題です。いずれにしろ、今や世界は完全にアメリカの思うがままです。アメリカが「黒」だと言えば、何だって「黒」なのです。この状況を変えるためには、アメリカ以外のすべての国がアメリカと敵対するぐらいの気持ちにならなければ無理でしょうが、とうていそんな事態は生じないでしょう。今回、フランスやドイツは対等の独立国家としての気概を示しましたが、イギリスや日本はアメリカ追従外交に終始しました。特に、日本はひどいものです。危険回避のためには、サッカーの日本代表がアメリカ遠征をやめるのは常識的判断なのに、メンツを潰されることを嫌がったアメリカが「守ってやるから予定通り遠征に来い」と言えば、一転して「やはり遠征に行きます」と言わざるをえないぐらいです。(たぶん、この方針変更には、政治家からの圧力がかかっているにちがいないと私は見えています。) アメリカに対しては、独立国家としての自主的判断をまったくできない日本は、まるでアメリカの属国です。(もしかしたら、アメリカは日本のことをアメリカの51番目の州か植民地ぐらいに思っているのかもしれませんが。) 民主主義を横糸に、自由主義を縦糸にして織り上げた誰の目にも見えない「世界一美しい衣装」をまとった世界の「裸の王様」に、「王様、裸だよ」と言える素直な子供はいないのでしょうか? いや、言っている国はあるわけですよ。そうかあ。「裸の王様」のお話は、子どもの発言で王様も他の人々もみんな目が覚めるという結末になっていますが、現実はそんなに甘くはないんですね。実際には、王様のおべっか使いが、そういう子どもをつかまえて追い出し、王様は「やはり我が輩の衣装は世界一美しいのだ」と思いながら暮らし続けるんでしょう。フセインや金正日がそれぞれの国の「裸の王様」であるとアメリカは批判するわけですが、アメリカという国家が実は世界の「裸の王様」だということは自覚できないようです。アメリカは、軍事力によって世界に自分の価値観を押しつける独裁的皇帝そのものです。今や世界はアメリカの恣意的判断によって断罪される恐怖政治の時代に入ったようです。各国はアメリカの顔色を窺いびくびくしながら暮らしています。国連に民主主義を、各国に自由を!

第5章 嫌咳権(けんがいけん)の確立を!(2004.1.29)

「嫌煙権」という言葉は、タバコの煙は受動的に吸わされるだけでも体に害があるとい

うことから、近くでタバコを吸うのを拒否する権利として1970年代末に造語され、今や広く知れ渡るようになりました。法律的にはまだ認められた権利ではないと思いますが、社会的にはすでにそれなりに留意しなければならない権利として認められていると思います。今、私はこれと同じ様な意味で、咳を嫌う権利「嫌咳権」（けんがいけん）という言葉を作り、一般に広めたいと思っています。風邪もインフルエンザもSARSも、咳やくしゃみなどで空気感染する病気です。なのに、日本では———というか、たぶん世界のどこの国でも———、咳を拒否する権利は確立されていません。これはおかしくないでしょうか。その影響力は受動的喫煙などとは比べものにならないほど直接的で甚大なものです。SARSとはっきりわかれば隔離までされてしまうわけですが、わかるまでは、ただの風邪だろうと本人が思っていれば、SARS菌をまき散らしながら生活をしているわけです。SARSではなくても、インフルエンザでも風邪でもみんな決してうつされたくないはずです。こうした咳やくしゃみによる空気感染を減らすのに「嫌咳権」という言葉は大きな効果を持つはずです。的確な言葉が作られ広まると社会は急速に変わります。「嫌煙権」がそうでしたし、「セクハラ」もまた新しく作られた言葉が社会を変えた典型例です。咳やくしゃみを拒否する権利「嫌咳権」が一般に普及すれば、咳やくしゃみをしている人間は外出をしてはいけない、どうしても外出しなければならない場合はSARSの際に使われたような口と鼻を完全に覆うマスクをつけることが社会的常識になり、見知らぬ人間からうつされる危険性は大きく減るはずです。咳が結構出のに頑張って仕事をしていますなんていうのは美談ではなく迷惑行為です。「誰かにうつして早く治ろう」なんて言う人はまさに犯罪行為です。まあ、ここまできつい言い方はしたくはありませんが、「嫌咳権」という言葉を広め、人前で咳やくしゃみを安易にすることは非常に迷惑な行為であるという社会的認識がぜひ広まってほしいと思っています。

第6章 シュレッダーが家電化する？（2004.4.10）

この4月から吹田市の家庭ごみは半透明の袋に入れられたものでないと収集してもらえないことになりました。東京ではずいぶん前からやっていたし、同じ制約をかけている市町村は、全国各地にたくさんあります。今回、自分が住む吹田市でも導入となって、しみじみ思ったのは、ごみが捨てにくくなったなということです。半透明ですから、ごみの中身ははっきりわかってしまいます。ある意味、プライバシーが丸見え状態です。特に気になるのが、クレジットカードをはじめとする様々なID番号が記されている通知書です。毎月様々な通知書が届き、そこには大体ID番号が示されています。クレジットカード

ド番号がわかれば、インターネット上などで、他人になりすまして、商品を購入することも可能になります。もちろん、プライバシー情報の遺漏はあちこちで起きており、問題なのはごみだけではありませんが、ごみの場合はよく知った近隣の人の目にも入ってしまいますので、特に気になります。で、その対策として、私が思ったのが「シュレッダーを買おう」ということでした。シュレッダーで切り刻んでから捨てれば、少なくとも情報は数百倍の確率で解読されにくくなるはずです。私と同じ発想でシュレッダー購入を考え始める人は今後どんどん増えていくのではないかと予想されますので、近い将来、シュレッダーが一家に1台常置される日が来るのではないかと思います。

ちなみに、私の家で使い始めて便利だったので、17年ほど前に「食器洗い機が一家に1台置かれる時代がすぐに来る」と予想したのですが、普及率がなかなか伸びなかったという経験をしています。最近になってようやく普及率が伸びてきているようですが、大きさが問題だったようです。シュレッダーの普及率は予想通り伸びるかどうかが、今後の展開を見守りたいと思います。

第7章 捕まったブランコ (2004. 6 .30)

うちのマンションの敷地内にあるゆりかご型のブランコが1ヶ月ほど前からロープで縛られたままで放置されています。なんだか悪いことをして捕まってしまったみたいで哀れです。うちの子どもたちが小さかった時はよくお世話になったブランコなのにと、なんだか可哀想でなりません。なんでこんなことになったかと言えば、今年の4月に高槻の回転遊具で起こった事故のせいです。動く遊具は危険だという単純な発想で使用禁止にしてしまったということです。こうした事態はうちのマンションだけではなく、あちこちで生じていることと思います。本来はきちんと点検して安全に利用できるようにするのが筋だと思うのですが、とにかく少しでも危険性のあるものは使用させないという「臭いものには蓋をする」という根本的な解決を避ける安易な発想に基づく予防策です。先日読んだ新聞には、落ちたら危険なので、今学校から高鉄棒がどんどん消えているという記事も出ていました。滑り台も高いから危ないと言われて使用禁止になる日ももうすぐでしょう。しかし、そんなに過保護な環境を作り出して子どもを育てるのは間違った方向ではないかと思っています。外を普通に歩いているだけでも交通事故に巻き込まれる可能性はあるし、上からものが落ちてくるかもしれません。徹底して危険を回避しようと思ったら、子どもを外では遊ばせられなくなるでしょう。そんな無菌室で育ったような子どもが成長して社会の荒波の中でまともにやっていけるとはとうてい思えません。過度な危険は回避するように大

人が気を付けるのは当然ですが、適度な危険（子どもが自分の判断で避けうる程度の危険）はむしろ経験させて、危険回避の方法を会得させるようにすべきです。なんで、ゆりかご型ブランコのような危険度の小さいものまで使用禁止にしてしまうのか、疑問でなりません。まあ個々の親がそうしろと言っているというよりも、管理責任を問われる可能性のある管理組合などが、事故が起こってから非難されるのを恐れて決めてしまったことだと思います。子どもが事故や事件に巻き込まれると、すぐにマスコミは子ども自身よりもその問題に関係した権力主体（行政や学校等）を責め立てるので、こうした過度な予防対策が取られるのだと思います。どんなに注意しても事故はどうしても起こります。起こったときに、如何にそれを受け止めるかが、社会にとっては重要です。レアなケースを拡大解釈して全体のバランスをおかしくするような対策は取ってはならないのです。

第8章 「大学3年制時代」がやって来る？ (2005. 2. 24)

大学卒の資格を得るには、決められた単位を取得するだけではだめで、4年間以上在学することが必要と決められていましたが、近年の規制緩和の流れの中で、文部科学省が、特別に優秀な学生は3年間で卒業することも可能であるという方針を打ち出したため、様々な大学がこの「早期卒業制度」を導入し始めています。現時点での主たる狙いは優秀な学生を3年で卒業させて大学院に進ませることにあるようですが、私はいずれ大学院に行くかどうかに関わらず、大学全体が3年制に向かって動いていきそうな気がしています。これは、費用対効果を考えれば当然のことで、通常の授業料の4分の3で同じ資格が手に入るなら誰だってその道を選びたくなるはずです。「特別に優秀」をどの程度の基準にするかは大学が独自に決めればいいのでしょうから、このハードルを比較的低く設定（例えば、取得科目の平均点が80点以上などと）し、うちの大学は3年で大卒資格が得られますというのをウリにするとところが出てきたら、あとは雪崩をうったように他の大学も追随することでしょう。そして、3年で卒業する学生が全体の中で無視できない割合になったら、カリキュラムも3年卒業用に変えて行かなければならなくなるでしょう。

無駄な足掻きかもしれませんが、私はこの早期卒業制度の導入には抵抗したいと考えています。確かに、わが学部でも4年生の時には授業はゼミしかないという学生がたくさんいます。たったひとつの授業のために1～3回生と同じ授業料を払うのはわりに合わないなど思っている人も少なくないでしょう。しかし、一見無駄も含んでいそうな4年間という時間が持つ意味は非常に大きいと思っています。3年では中学や高校と同じ修学期間になります。中学や高校の3年間ってあまりに早くなかったですか？1年経ってようやく学

校に慣れたなと思っていたら、夏休みにはすぐ上の学年がクラブを引退して最上位学年と言われ、秋になったらそろそろ受験のことも考えなければいけない時期になる。そんな慌ただしい3年間だったと思います。受験に関係のない本を読んだり、趣味に没頭したりする時間も取りにくいのが3年制です。大学も、最近では就職活動のスタートが早くなり、研修という名の「強制労働」も卒業前から行われるのが一般化してきているので、昔の大学生に比べると、ずいぶん慌ただしい4年間になってしまっていますが、それでも4年間は中高に比べたら、まだ余裕があります。その時間的余裕があるからこそ、「人間力」とも言える「教養」や「思考力」や「経験」を増すことができるのです。3年で卒業して就職なんてことになった日には、そんな力を身につけようという人はほとんどいなくなってしまふでしょう。人間は「促成栽培」できません。時間があるからこそ身に付くものがたくさんあるのです。特定の専門に関する知識だけなら3年で学ぶことも可能かもしれません。しかし、大学はもっと総合的な力を養う場ではないでしょうか。人間は工業用ロボットのように同じ仕事だけをしていては満足できない生き物です。自らの中の様々な能力を使って、様々な関心、欲求を満たして、初めて自らの生に納得が行く、そういう存在であるはずです。大学3年制（＝早期卒業制度）は、総合的な人間力の弱い、視野の狭い人間を作り出す「大学改悪案」だと思います。

第9章 人生八掛け説 (2005. 6 .15)

「人生八掛け説」というのは、結構よく聞く話なのですが、ご存知でしょうか。「昔の人と比べて、今の人は精神年齢でみると、実年齢に0.8を掛けたぐらいではないか」という説です。よく言えば若々しい、悪く言えば幼いということになります。20歳で16歳、30歳で24歳、40歳で32歳、50歳で40歳、60歳で48歳、70歳で56歳、というわけです。「幼稚な大学生」、「婚姻年齢の上昇」、「元気な高齢者」といった言葉がしばしば聞こえてきますが、この「人生八掛け説」で見ると、なるほどと思えます。私も今年50歳になりましたが、教え子たちから「先生は若いですよ」とよく言ってもらっていますが、「若い」と思っている人もまさか20歳代には見てくれないでしょう。たぶん、「昔なら40歳って感じじゃないですか」というのが妥当なところでしょう。かなり説得力のあるこの「八掛け説」なのですが、ひとつ疑問があります。それは、「昔」って一体いつの時代だろうということ。もともと私がこの話を初めて聞いたのは、私の父親からでした。私の父親も還暦を迎えた時に、「今は還暦と言っても、昔の八掛けだから、48歳ってところだな」と笑っていました。つまり、私の親の世代（現在の学生たちから見たら、祖父母の世代）で

も、この感覚を持っていたわけです。私の父親が考えていた「昔」と私が考える「昔」が同じはずはないですね。どう説明したら、より説得力のある「人生八掛け説」になるのだろうとずっと考えていたのですが、ようやく自分なりに納得のいく答えが見つかりました。それは、「人は一世代前と比べて、一世代後の精神年齢は実年齢の八掛けと思いがちである」という形で一般化できるのではないかというものです。「昔」と言っても、人が本当に自らの直接体験として知り記憶できる「昔」は、親世代までです。自分の親のことなら30歳過ぎあたりから、自分の体験に基づく記憶として持っている人が多いと思いますが、祖父母となると60歳代半ば過ぎ以降のイメージしかないはずです。自分が30歳ぐらいになったときに、「あれっ、昔の30歳はもっと大人だったような……」と思った時に、無意識に思い浮かべている昔の30歳は親の30歳であることが多いのではないかと思います。自分自身で昔と比べるのは、早くて30歳くらいからでしょう。それより若い年齢に関しては、現在の若い世代が昔と比べて「自分たちは幼いな」とか「若いな」と思うのではなく、一世代前の親世代が一世代後の子世代のことを批判的に語るときによく使っているように思います。「最近の学生は幼すぎる」「お母さんがあなたの年齢だった頃には……」etc.最近では、七掛け、六掛けではないかなんて声も出てきているのですが、これも長生きしている祖父母世代から孫世代を見れば、 $0.8 \times 0.8 = 0.64$ でありえなくはない話です。

この精神年齢の低減はいつの時代でも通用するのかわかりませんが、社会が豊かになり生活が楽になる方向に向かっている時代なら通用するのではないかと思います。戦後日本社会のように急速に豊かになり、生活が楽になってきた社会では、「八掛け」というような急速な低減が生じるわけですが、一世代前と比べてあまり豊かに楽になっていない社会であれば、「九割九分九厘掛け」といった小さな低減しか起こらないでしょう。（人類史的に見れば、つい最近までずっとそんな時代だったと言えらると思います。）理論的には、一世代前より社会が貧しく生活が苦しくなるような時代が来たら、親世代が「最近の若者は自分たちの頃よりしっかりしているな」（十割以上掛け）と思うこともあるかもしれません。これまでのところ、短期的な逆転の時期はあったものの、長期的には人類社会はより豊かに、より人々の生活を楽しんできましたので、前の世代が後の世代を見て精神年齢が上がったなと思うことはほとんどなかったのだらうと思いますが、果たしてこれからはどうでしょうか。まあ大多数の人々は——つまり社会は——より楽になる方にしか進みたがりませんから、前の世代より後の世代の方が精神年齢が高くなるという時代が来るとは思いがたいのですが……。

第10章 育児休暇 (2005. 6 .24)

NHKで少子化問題を扱っていて、後半では男も育児休暇を取るべきかということが議論されていましたので、私も意見を述べてみたいと思います。結論から先に言ってしまうと、男も女も育児休暇以外の形で子育てに関われるようにすべきだというのが、私の考えです。現行の育児休暇は、一定期間仕事を休んで子育て専業になるわけですが、それはストレスが溜まる生活だと思います。もちろん、子育てをしながら、友人とおしゃべりや趣味を楽しむことができるなら、子育て期間に家庭にいるのも悪くはないでしょう。実際、専業主婦生活を楽しんでいる方の中には、そんな風にうまく子育てを楽しんでいる方もおられることと思います。しかし、急に短期間だけ育児休暇を取ることになった人——特に男性——にとって、そんな風に時間を使うことは困難です。子育てはしんどいこともありますが、笑った、お座りができた、ハイハイができた、立った、歩いた、喋ったと、子どもの成長を目の当たりにするたびに感動を得られるすばらしい体験です。男だって、こうした体験になるべく関わった方が幸せです。しかし、そのために仕事を完全に休んでしまう必要はないと思います。どんな職場でも、子育て期間は勤務時間に関しての相当の配慮をすることにしたら、十分対応可能です。勤務体制のフレックス化（出勤時間や退社時間に関する十分な配慮）、有給休暇の増加などを徹底させれば、育児休暇よりもよい形で男も——働いている女性も——子育てに関われるはずで、これまでの日本人は働き過ぎだったと思います。「モーレツ・サラリーマン」の時代なんかとっくのとうに終わったはずなのに、教え子達の働きぶりを見ていると、長時間残業や通常の有給休暇さえ取ることができないという状態が一般化しているようです。「仕事か子育てか」ではなく「仕事も子育ても」という社会になるべきです。政府は、男性社員に育児休暇を無理に取らせるような政策などに力を入れるより、有給休暇利用の徹底化や、各自の事情に応じたフレックス勤務体制を作るように企業に強く働きかけるべきです。私は育児休業制度のない時代に3人の子育てをしてきましたが、その方がよかったような気がしています。まあ比較的時間に融通のきく仕事ですから、ちょうど「仕事も子育ても」味わえたのだと思いますが。

第11章 友人になってしまう男と女の時代 (2005. 7 .10)

最近大学生たちを見ていて思うのは、男女を問わずみんな仲良しだということです。私が若い頃は「男と女の間には友情は成立するか？」なんて問いが真剣に議論されていたものですが、今やこんな問いはまったく意味のないものになってしまいました。今の若い人に

してみたら、「なんで成立しないなんて考えたんですか？」と逆に質問したくなるころでしょう。昔は、男と女の生き方は異なっているのが普通で、それに合わせて男女の価値観も異なっており、互いに異性であることを意識しやすい環境にありました。しかし、ここ30年間、ジェンダー（社会的文化的性差）の見直しが訴えられ続ける中で男女の価値観はどんどん近づいてきて、今や、男だ女だと言うことをあまり意識せずに若い人たちは友人つき合いをするようになっていきます。女性が活動的で積極的になり、男性がおとなしく気配り上手になってきて、両性は非常に似てきました。こうした男女関係になってきたことはある面でよいことなのでしょうが、他方で異性を異性として求めるエネルギーは確実に減退しているような気がします。こんなに友人として仲良くなってしまうと、ここから恋をする男と女に発展することはあるのだろうかとちょっと気にかかります。もしも長年親しくつき合う異性はみんな友人になってしまうとしたら、あまりよく知らない人として恋はできなくなったりはしないでしょうか。最近の芸能人の結婚報道でも、長くつき合ってきてゴールインというケースが減り、出会って数ヶ月でのスピード結婚というケースが増えてきているような気がするのですが、こうしたことももしかしたら長くつき合うと友人になりやすい男女関係が影響したりしているのではないのでしょうか。

先日ゼミで、結婚願望があるかどうかを学生たちに聞いてみたのですが、ある男子学生が「願望というより、35歳ぐらいまでに結婚していないと世間体から言ってまずいので、その頃には結婚しているんじゃないかと思います」と言ったら、他の多くの男性陣も「ほくも同じですね」と同意しました。私なんかは若い時に、異性を求める気持ちから強い「結婚願望」がありましたので、しみじみ時代は変わったなと思いました。男性陣の回答を聞きながら、女性陣は「え～、そうなんだ」とびっくりしたような声も上げていましたが、女性陣の方もどうなのでしょうね。相手もよく見えないうちに勢いで結婚してしまう「スピード結婚」や計算なき「できちゃった婚」を忌避する人は、結婚を就職活動と同じくらい情報集めをして将来性を分析して結論を下すべきものと非常に現実的に考えてはいないのでしょうか。頃合いの年齢で自分のパートナーとして適当な男（結構この基準が高いような気がします……）がいれば「就婚」するけれど、そう判断するに値する男がいない場合は、「株式会社・実家」の一員であり続けた方がいいという感じではないのでしょうか。こういう現実的な結婚観にはやはり異性を異性として求める気持ち（＝恋？）などほとんど入り込む隙間がなさそうな気がします。性差が小さくなり親しい異性とは友人になってしまう時代の中で、結婚に至るパターンは「できちゃった婚」と「スピード結婚」と「友情婚（くされ縁婚?）」の3通りぐらいでしょうか。「できちゃった婚」の先には「生んじ

「ちゃった離婚」が、「スピード結婚」の先には「こんなはずではなかった離婚」が、「友情婚（くされ縁婚?）」の先には「セックスレス夫婦」という将来が待ち受けていそうです。ちょっとシニカル過ぎるでしょうか。そんな暗い未来ばかりではないことを信じたいと思います。

第12章 キャスター付バッグの普及 (2005. 7. 26)

ちょっと前までは空港でのみよく見かけていたキャスター付バッグを、最近はいろいろな旅先でよく見かけるようになりました。利用者の年齢はかなり幅が広いようです。私も持っていますが、確かに便利です。ちょっとサイズが大きくて通常のコインロッカーには入れにくいという難点がありますが、重い荷物を軽く運べるのは、何にも代え難い魅力でしょう。この便利なバッグがここに来て急に普及し始めたのは、技術の改善と低価格化も影響しているかもしれませんが、それ以外にいくつかの社会的原因も考えられるような気がします。第1の原因として、駅を中心に都市のバリアフリー化が進み、ほとんどの場所でバッグを引っ張って歩けるようになったことがあげられます。エレベータやエスカレータが設置されておらず、町に出たらでこぼこだらけが当たり前だった時代には、キャスターの良さを活かすことはできませんでした。今やそれなりの都会なら、バッグをスムーズに引っ張って歩けます。第2に、田舎を歩いて見て回る旅よりも、都会を中心に観光ポイントから観光ポイントへ乗り物で移動する旅が主流になったためではないかと思えます。1970年代には大きなリュックを背負った「カニ族」と呼ばれる旅人が、北海道を中心にあちこちで見られたものですが、今はもうそういう旅人に出会うことは滅多になくなりました。北海道に若者が旅行に行っても、行くところと言えば、札幌、小樽、函館という都会、それ以外のところに行くときはレンタカーで、というのが現在の旅の一般的なスタイルでしょう。そして第3の原因として、日本人が総じて筋力が弱くなった（あるいは筋力を使いたがらなくなった）という要因もあるように思えます。少しでも楽がしたい、しんどい思いはしたくないという気持ちが、年齢に関わらず強まっているように思えます。生活が便利になる中で、我々はどんどん肉体の力を使わない生活をするようになってきています。「箸より重い物を持ったことがない」というのは極端にしても、若い女性たちの多くは本当に華奢な腕をしています。あれじゃ先々子どもも抱けないんじゃないのかなと心配になるような人も結構います。2泊以上の旅をするときには、キャスター付バッグでないと、となるのもむべなるかなと思えます。男性にしても細い人が多いです。細くなくても、昔の人と比べたら筋力はみんな相当に落ちているのは確かだと思います。こうした

要因が相まって、キャスター付バッグが普及しているのではないかと、私は見えています。

第13章 いつか消える戒名と法事（2005. 8. 31）

私は結婚式に媒酌人がいるのは当たり前だと思っていた世代ですが、今はほとんど見なくなりました。ここ20年間で何百年も続いてきた日本の結婚式のこの慣習は大きく変化し、あっという間に消え去ろうとしています。伝統的な儀式でも残るものもたくさんあると思いますが、消えていくものも結構あるように思います。で、私が今後20～30年で消えて行きそうだと思うのが戒名と法事です。戦前の記憶を持った今の70歳代以上は、まだ戒名も法事も大切にしたいと思っている世代だと思いますが、60歳代を過渡的世代として50歳代以下になったら、戒名なんか要らないし、法事よりお別れの会、偲ぶ会といった宗教に関係ない形でやってもらいたいという人の方が間違いなく多数派を占めると思います。20～30年経った時に死んでいく本人たちがそういう意向を示せば、より伝統的行事に関心のない子世代があえてそれにさからって戒名をつけたり、法事をしたりはしないでしょう。「葬式仏教」とも言われる既成仏教各派にとっては財源を断たれる死活問題です。まあ現在の仏教と僧侶を評価していない私に言わせれば、お布施という名目で不当に高い収入を得ながら、税金は払わずに済ませてきている既成仏教が、いずれ必ず味わわなければならぬ既定のコースだと思いますが。そうなった時に、仏教がどうするか？何もせずに「信仰心にかける者どもには仏罰が下る」なんてぶつぶつ言っているだけなら、座して死を待つのみです。きっと、戒名や法事の価格破壊をする寺、宗派が出てきそうです。これは、値段やサービスによっては多少人気が出るかもしれません。まあそれでも厳しいでしょうね。そのうち、経営が成り立たなくなっ、放棄されるお寺がたくさん出てくるかもしれません。これを避けるためには、墓地を持っているお寺なら、民間墓地管理会社+宗教サービス提供会社に変貌して行くという思い切った変身をしような気がします。無縁墓になったところはどんどん整理して、新たな墓希望者にそこを分譲していく。その際には、葬式・法事サービスもセットで売るといったところでしょうか。本当は、宗教の原点に立ち返って、檀家であるか否かに関わらず、お布施を包むか否かに関わらず、人々が悩みを話し、相談に乗ってもらい、癒されるといった場所としてお寺に復活して欲しいのですが、そんなボランティア的なことをできる僧侶がたくさんいるとは思えませんので、潰れるか、墓地・法事販売会社になるかでしょう。お寺の将来は間違いなく暗いと思います。

他方、神社の方は、お寺よりはるかに生き延びられそうです。人々が神社でする行事と言えば、「お宮参り」「七五三」「初詣」「祭り」様々な「祈願」といずれも若い人を含めて

結構根強い人気があります。少なくともいずれも後20～30年で消えるような行事ではありません。お寺に比べたら神社の方が先行きの見通しははるかに明るいと思います。こうやってお寺と神社を比べてみると、より日本人の心にフィットしているのは、やはり日本の自然風土に対する恐れ・崇拜といったアニミズム的自然信仰を元に生まれてきた日本独自の神社信仰の方で、仏教は1500年経っても実は日本人のDNAに浸透しきっていなかったのかな、なんて思ったりします。いずれにしろ、2030年を迎える頃（あるいはもっと早いかもしれませんが）、「寺院の危機」が日本各地で叫ばれるようになっているのは確実だと思います。

第14章 小泉的社会とホリエモンの夢 (2005. 9. 10)

いよいよ衆議院選挙が明日に迫りました。すべての報道機関が小泉自民党の優勢を伝えています。正直に言ってがっかりしています。何で、みんなそんなに小泉さんがいいのでしょうか。あんな荒っぽい「ワンフレーズ男」の言葉にどうして惹かれるのでしょうか。「自民党をぶっこわす」どころか自民党を強化しているのに、それでいいのでしょうか。確かに小泉さんは従来の自民党政治家とは違うタイプですが、その背後には「小泉純一郎」という仮面をつけた森「神の国」喜朗前総理大臣や、青木「昔ながらのキングメーカー」幹雄自民党参議院会長などがいて、郵政改革以外は彼らが従来型の政治を動かしていこうとしていることが見えないのでしょうか。有力議員が自分の選挙地盤に公共事業を引っ張ってくるという仕組みは、政権交替が行われな限り継続されるでしょう。国の金を使って自民党有力議員に恩を売っておけば、何かあったときに官僚の言うことを聞いてくれる、だから官僚も自らの匙加減ひとつで、公共事業を提供する。そんな仕組みがこれからも継続されます。私がいくらこんなことを言っても、世間では小泉さんは何かを変えてくれそうだという期待感はかなり高いようです。確かに変えていきそうな部分もあります。それは何かと言えば、日本をより競争社会にし、勝ち組、負け組の差を拡大する方向への変化です。「小さな政府」「官から民へ」といった言葉に多くの人がうなずきます。でも、それって、初期資本主義の牽引力となったアダム・スミスが唱えた「夜警国家論」とほとんど変わりはありません。「民」に任せきっていたら、貧富の差が拡大し経済恐慌が起き、大混乱を極めたという歴史を再度繰り返すことになりはしないのでしょうか。アダム・スミスが復活するなら、カール・マルクスも復活してきそうです。

私は選挙権を得て30年になりますが、今回ほど日本共産党の主張がまともに聞こえる選挙は初めてです。日本という社会は、実は「もっとも成功した社会主義社会だ」という見

方が長らくありました。国による経済統制がよく効き、高い累進課税率で高額所得者から高い税金を取り福祉等に回すことで所得の再分配を行い、公共性のある事業は採算の如何に関わらず国が責任を持って行うという社会システムでしたので、自由主義経済国家というより、まさに社会主義経済国家というのものが間違いではなかったと思います。9割以上の方が自分の生活を「中程度」と意識し「一億総中流」という言葉が流行した1970年代後半あたりが、「日本型社会主義社会」の絶頂期だったと言えるでしょう。こういう時代においては、より過度な社会主義化を求める共産党の主張は、多くの大衆には説得力を持って聞こえてきませんでした。しかし、1980年代半ばの中曽根内閣以降、日本は「行政改革」「民間活力の導入」を合言葉に、自由主義経済化を進めてきました。その結果として今や日本も勝ち組、負け組のはっきりした階層格差の大きな社会になりつつあります。この方向性をより加速させようとしているのが小泉改革です。採算の取れない地方の郵便局はなくなってもよい、地方の公共事業に使われてきたお金を銀行から企業に流すようにする。これが小泉さんの言う「官から民へ」の正体です。「官から民へ」の「民」とは誰なのかということをよく考えて見なければならぬだろうと思います。おそらく「庶民」の「民」ではなく、「民間企業」の「民」です。郵政事業が民営化されて、庶民の生活がよくなることはほとんどないでしょう。サービス精神のほとんどない郵便局員の愛想が多少良くなり、都会では一日2度くらいの配達が行われるようになるかもしれませんが、経済的なプラスはないし、近くにあって便利だった「特定郵便局」がどんどん統合され、不便になるのは間違いありません。（「特定郵便局」なんて田舎にしかないと思っているかもしれませんが、不在郵便物を預かるような郵便局以外はほとんど特定郵便局ですから、都会でも多くの方が特定郵便局のお世話になっているはずです。）今回共産党が主張しているのは、言ってみれば、こんな「弱肉強食」の自由主義経済化を進めて行っているのかという問いなので、非常にまともにも聞こえるのです。小泉さんの主張がアダム・スミスのなればなるほど、新たなマルクスが出てくるのではないかという気がして仕方ありません。

小泉改革が進んで喜ぶのは、大企業や金持ちです。自家用ジェット機を購入するようなホリエモンが小泉改革を支援するのは当然でしょう。より豊かな人・企業をより豊かに、より貧しい人をより貧しくするアメリカ型経済体制が、小泉さんの理想なのでしょう。アメリカでは今回のハリケーン被害にあった町で強盗・略奪が日常化しています。通常の合法的手段では豊かになれないと絶望した人々は、非合法的手段を利用することに躊躇がなくなります。いずれ日本もそんな社会になっていくのかもしれませんが、「おやじ狩り」「老

女のカバンのひったくり」など、日本でもすでに萌芽は現れているような気がします。しかし、アメリカには他方で寄付や奉仕の精神を持った金持ちもかなりいます。日本はどのようなのでしょうか。一般庶民がボランティアをする話はよく聞きますが、ホリエモンが災害の起こった地域に寄付をしたなんて話は聞いたことがありませんし、他の金持ちでも災害支援で寄付をしたなんて話はあまり聞いたことがありません。ホリエモンの夢って、何なんでしょうね。お金を稼ぐのがそんなに楽しいのでしょうか。お金はないと困りますが、ちょっとした旅に出たり、たまにおいしいものを食べられる程度の余裕があれば十分じゃないのでしょうか。自家用ジェット機を買うほどのお金を持っていて、さらに儲けて彼は何をするつもりなのでしょう。お金を稼ぐのは手段ではないのでしょうか。ホリエモンはお金を稼ぐこと自体を目的にしていらないのでしょうか。汗水垂らして働いて家族と小さな幸せを得ている人間と、株の売り買いやITという訳のわからない情報産業で膨大な収入を得ている独身男のどちらが幸せなんでしょうね。誰かホリエモンに聞いてほしいものです。「あなたの夢は何ですか？あなたの考える幸せって何ですか？」って。政治を目指す限りは総理大臣になりたいと彼は語っていましたが、弱者も視野に入れた社会の運営が彼にできるとは思えないのですが……。そもそも「社会」というものを彼はちゃんと考えたことがあるのでしょうか。「公」を無視した「私」の欲望の体現がホリエモンという存在ではないかという気がしてなりません。それでも、小泉的社会になればなるほど、能力のある多くの人はホリエモンの夢を追いかけていくことになるのでしょうか。

第15章 戦後は終わった (2005.12.27)

「戦後は終わった」なんて、何を今更言い出すのかと思われるかもしれませんが、あと数日で2005年が終わるのを前に、ふとそんなことを思ってしまいました。今年は第2次世界大戦(or太平洋戦争or大東亜戦争)が終わってちょうど60年でしたが、結局そのことに関する盛り上がりはほとんどありませんでした。10年前の戦後50年の時は半世紀ということもあって、メディアもかなり大きく取り上げましたが、今年は人々の関心が「戦後60年」に引きつけられることは結局ありませんでした。「戦後は終わった」という言葉は、1956年の『経済白書』に書かれた言葉で、前年の1955年に戦前の最高の経済水準を超えたことで戦争を原因とした経済的な落ち込みは完全に回復したという意味で使われた言葉でした。しかし、その1955年に生まれた私たち世代にとっても「戦後」という言葉は「戦後日本」「戦後史」といった形で始終耳にするなじみ深い言葉であり続け、現代を「戦後」という枠で捉える癖がついていました。若い人たちにとっては大分以前から主観的には

「戦後」と言われてもピンと来ていなかったかもしれませんが、世間（メディア）では「戦後」という言葉がそれなりに通用していたように思います。でも、今年（2006年）の状況を見ていたら、もう「戦後」という言い方は、死語あるいはある時代を表す歴史的な用語（言わば「昭和」と同じ）になったことが、社会的にも確認されたように思います。来年以降は、メディアでも「戦後」という言い方はほとんど使われなくなりそうです。

おわりに

長さも内容も実に様々なエッセイ集なのですが、どのような問題であっても、社会とつながって考えてみたいと思いつきながら書いてきた文章です。その狙いが読者に伝わっていれば嬉しく思います。今後も、楽しみながらこうした作業を続けていこうと思っています。

—2006.6.27受稿—